



文：太田哲也

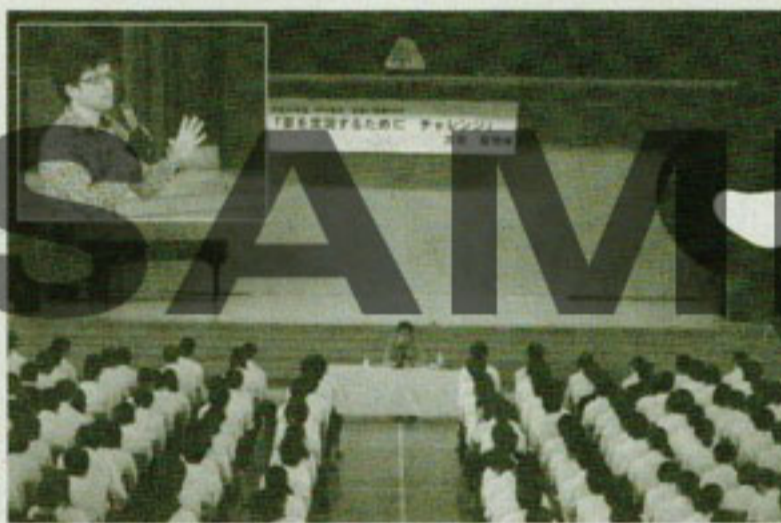
太田さんは出光興産とコラボレーションして、ドライビングレッスンを開催していることは先月号で紹介したが、その他にも「出張授業」という講演を年に数回行っている。そこで、太田さんが小・中学生に伝えたいこととは…。

若者のクルマ離れが問題視されているが、僕が全国の小中学校を講演で回ってきて、子どもたちはやっぱりクルマが好きだよなあ、と感じる。赤ん坊の時は動くものに興味を持ち、やがて乗り物に興味に移る。それは人間が生まれ持ったDNAで、十数年でそう簡単にDNAが変化するわけではないだろう。ただ環境の変化は感じる。いつも話の冒頭で「夢がある人？」と質問するのだが、昨年も今年も宮城県の二校では「公務員」という答えが返ってきた。小学生に「夢は公務員」は不釣合いな印象だ。

東北では東日本大震災そして近隣の製造工場の撤退などにより、近年、大人たちに「安定」を願う思いが広まっている。変化したのは社会環境と大人の価値感で、それを子どもたちは繊細に感じているのだろう。

だが大人が消極的になれば子どもも影響を受ける。しかし世の中がうまく回っていない時期こそ、失敗を恐れずチャレンジして現状を打破する若者の力が必要ではないか。

第1部では「チャレンジ」をテーマに、太田さんがレースでの事故からどのように再起してきたのか、そしてあきらめないことの大切さを話した。そして第2部では「レースー太田哲也の夢をつかむためには」と題して、レースーになった経緯やセーフティドライブの大切さ、クルマの楽しさについて語った



を知り講演を頼んできた。当時の僕はまだ療養過程で、顔には絆創膏がいっぱい貼ってある状態だった。もちろん心の傷も癒えてはいなかった。ドラマだったら「怪我が治ってよかったねー」とハッピーエンドで最終回を迎えられるが、現実はその後に、社会復帰、という大きな課題が現れる。

ある意味、高校生と同じ「青春」を生きていた。僕は青春をこう解釈している。それまで学校や親から守られる立場で、かけがえのない存在だった。だが社会に出ると、代わりはいくらでもいる。積極的にアピールして社会に自分を認めてもらわないと居場所は見つからない。

その現実には直面し、社会に適合できるように過去のプライドや価値観も一旦は捨てて、自分を作り変えなければならぬ。それはツライことだ。

実は僕も守られていた病院を出て、40歳を過ぎて新しい仕事や職場を見つけないければならなくなかった。社会復帰への大きな不安と希望が渦巻いていた。だからオレも君たちと同じ境遇だよ、と。上から目線で「こうしなさい」じゃなくて「オレはこうする気だよ」と話してきた。

に戻って先生に話し、先生が「クラッシュ」を読み、授業で取り扱うようになったらしい。やがて愛知の多くの高校から、講演依頼が来るようになった。

質問コーナーなどを通じて、高校生の置かれた心の内を垣間見ることもできた。中日新聞からの依頼で「中高生ウイークリー」という連載を始めたのもこの頃だ。高校生が記者となり、東京の僕の事務所まで取材に来てくれたこともあった。

その後、高校以外にも、看護学校や看護団体、医療関係、そして企業では幹部社員向け講演や入社式、教会、青年会議所、保育園協会、警察関係など、さまざまな団体からの依頼があり、さまざまな人たちと質問コーナーを通じて百数十団体延べ3万人以上と対話してきた。しかし、それでも小学校からの依頼はまだなかった。

小学校の出張授業は出光とのコラボで開始

出張授業が始まったきっかけは、20年ぶりに高校の同窓会で再会したラグビー部のひとつ上のキャプテンの言葉だった。「おう太田、元気になったか？ ところで今度うちの会社を手伝ってくれるか」と言われた。先輩だから「はい、わかりました」



▲フォルクスワーゲンTHEビートルを囲んで、新潟県魚沼市立堀之内中学校の全校生徒と記念撮影。みんな元気イッパイだ！

と答えたものの、社交辞令みたいなもんだらうと思っていれば、すぐに部下の人が僕の会社を訪ねてきてくれた。

先輩の会社、出光興産は社会貢献に力を入れている。打ち合わせで決まった二本の活動の柱が「エンジンヨイ&セフティ・ドライビングレッスン」と「小学校出張授業」だった。テーマは、クルマ好きを増やすこと、大人と子どもそれぞれに「夢とチャ

レンジ精神」を伝えること。

小学生相手に話を通じるのだろうか？ どんな言葉遣いがいいのか。不安もあった。それでも何か伝えられることがあるだろうと考え、朝日小学生新聞が全体を取りまとめ、出光と太田哲也のコラボで行う出張授業が4年前にスタートした。

話す内容は少しずつ変化しているが、基本的に「夢・実現・チャレンジ」をキーワードに「夢をかなえるため」という話が第一部。第二部は「クルマの魅力と交通安全」がテーマだ。クルマを手に入れると僕らの手足がワンピースのル

ファイのように伸びて自由を手に入れられるんだ。そして「クルマもチャンスの女神だ」と話す。交通安全に関しては「青信号でも油断して渡るな。自分の身は自分で守る気持が必要だよ」と伝えている。

自分でいうのもなんだが、生徒からの反応はすこぶる良い。

「チャンスの女神を知らなかった」「いろいろ前向きに取り組む気持ちになった」というメッセージをいっぱいもらった。

文字は拙いけれど、内容には大人顔負けの感受性を感じさせられる。先月のアンケートでは「ソフトボールを、最初はただうまくなりたかったけど、

これからはプロを目指すことでもっと練習に励もうという気持ちになりました」「勉強やツライことが、将来のダイヤの原石を磨くことだとわかりました」とあった。

人は、とくに感情の部分は成長が早いのだと思う。子どもたちからのメッセージを読むと本当にジーンと来る。

楽しみなのは「質問コーナー」で、子どもたちが何を聞いてくるのか、そして瞬間的に自分が何と答えられるのか、ドキドキするしワクワクする。

僕は子どもの頃、少々わがままな子だった。群馬県前橋市の

郊外、田舎の団地の子どもが通う小学校で、多少勉強と運動ができたから、自分が一番という気持ちが強かった。レーシング

ドライバーになった時、素養としてはそれが良かったとは思わなかった。「お先にどうぞ」と言っていたらレスにならないからね。

そんなことから現役時代は自分を輝かせることには興味があったが、反面、歳をとって輝けなくなることも大きな不安も抱いていた。それなのに、今、こうして、子どもたちからのメッセージに顔をほころばせ、彼女らが未来に活躍してくれることを心底楽しみにしている自分がいる。その変化に我ながら驚いている。

先日、12年前に高校生記者として愛知から僕を取材に来た女子高生が僕のトークショーに訪ねて来てくれた。「ボヤっとした

高校生活を送ってたけど、太田さんに出会って教師になろうと目標がはっきりしたんです」と言ってくれた。今、彼女は愛知県東海高校の先生で、大勢のPTAを引き連れてきてくれた。

それにしてもなぜ他人の活躍が楽しく感じられるようになったのだろうか。それはその子らの心の中で僕が記憶として生きることができているに気付いたからかもしれない。人間の肉体はいつかは滅びる。けど魂は生き続けられるのだ。

編集カトーの「出張授業見聞録」



「夢を実現するために、チャレンジ」それがこの出張授業のテーマだと聞き、「そういえばオレの子供の頃の夢ってなんだっけ…。今の夢ってなんだろう…」などと、改めて愕然とする自分があることに気付いた。

「夢」とか「チャレンジ」とかそういう言葉って、なんかカッコつけてる感じがして普段は使わないけど、太田さんが今回語っていたことを聞いた時に、すーっと自然に自分の中に入ってきた。それは彼が怪我からの社会復帰する時に経験してきたツライことや苦しいことだけでなく、楽しいことや将来への希望について、飾らない真っ直ぐな言葉で語ってくれたからに違いない。これを多感な中学生の時期に聞いたのだから、きっと学生たちには少なからず影響を与えていることだろう。

僕の中では、「チャンスの女神は待っているだけではやってこない！」というフレーズが一番印象に残っている。今後はこの言葉を肝に銘じて「合コン」に臨みます。なんとなく仕事して、なんとなく生活している人生じゃ、ハリがないしツマラナイ！ さて、一杯飲みながら夢を真剣に考えてみるとするか。

●11/24管生にてTEZZO RACERS CLUBや太田さんと一緒に走りませんか？初めての方も歓迎です。
●12/23「Tetsuya OTA出光ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON with FORD」開催決定。現在、参加者募集中です。
お問合せ、お申込先は、<http://www.sportsdriving.jp> まで。